

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 田中勤子 所属： 広島市立己斐上中学校 記録日： 2019年2月16日
キーワード： 学習支援 生活支援 余暇支援 自己肯定感

【対象児の情報】

○学年 中学校3年生

○障害名 知的障がい ソース症候群

○障害と困難の内容

- ・中学校の知的障害特別支援学級に在籍しているが、学校行事などで全体の動きに合わせて活動することが難しい場面が見られる。
- ・読み書きに困難が見られる。
- ・日常生活の中で、情報を正しく把握できていないことが多く、また、自分の思いが上手く伝わらないことがあり、本人が混乱した状態になることがある。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・代替手段を使って、読み書きの力を高める。
- ・情報を正しく把握し、活動や生活に楽しみを持ちながら、スケジュールを組み立てられるようになる。

○実施期間

2017年4月より2019年2月

○実施者と対象児の関係

田中 勤子（採択者本人 昨年度対象生徒の担任 今年度は専任の特別支援教育コーディネーター）
土脇 恭平（今年度担任）

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・中学校1年時、本校に知的障害特別支援学級がなかったため、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍。
- ・中学校2年時、知的障害特別支援学級が新設され、措置替えとなる。
- ・新設された学級の担任として、対象生徒と出会う。

出会った当時の様子

①学習面について

「読み」

- ・文字を音に変換して読むことができる。（ひらがな、カタカナの清音・特殊音節）
文字数が多くなると飛ばし読みや作り読みが見られた。
- ・文については、助詞「は」「へ」「を」を正しく読むことができるが、逐次読みや飛ばし読みが見られ、内容を把握することが難しい。
- ・絵本が大好きでよく教室の絵本を開いて音読していたが、自分勝手に作り読みをして楽しんでおり、絵本の内容を楽しんでいるのではなかった。

「書き」

- ・ひらがな50音を視写して書くことができる。「い」と「り」の書き分けが難しい。
- ・音と文字の繋がりが弱く、また音韻認識が弱いため、特殊音節や濁音半濁音の表記が難しい。

「話す」

- ・人懐っこく、自分から話しかけるが、構音に困難が見られ、幼児音が残る。発音が不明瞭で聞き取れない語が多い。また、語彙が少なく、状況がわからない人には話の内容が伝わりにくい。
- ・気になること、不安なことに対しては、何度も同じことを繰り返し質問していた。

「聞く」

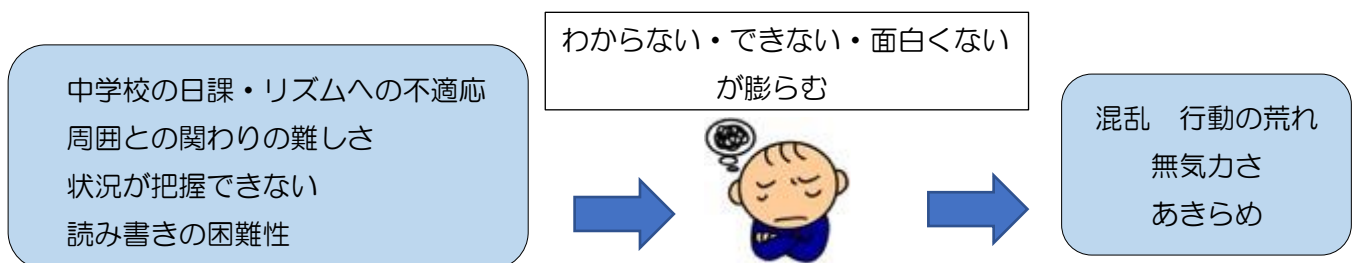
- ・刺激に弱く、気持ちがそれやすいため、集中して話を聞くことができる時間が短く、授業中の離席が目立った。
- ・自分本位な解釈をしてしまい、情報を正しく把握できていないため、混乱してしまう様子が見られた。
- ・絵本や紙芝居を読み聞かせると、集中してよく聞き、楽しむ様子が見られた。

「数概念」

- ・1から20までの数唱ができる。2と12、20を読み間違える。
- ・10までの数と指の対応ができる。多少の比較ができる。
- ・カレンダーの概念が身につけていない。時間割や一日のスケジュールを視覚化すると、見通しを持つことができた。1週間の見通しは持てていない様子だった。

②生活面について

- ・基本的に穏やかで大人に話しかけるのが大好き。初対面でも自分のことを伝えようとしていた。事務室や校長室、売店が好きで、時間を見つけては訪ねて行き、コミュニケーションをとっていた。しかし、同年齢の子どもに対しての関わりは稚拙で、不適切な言葉で注意を引こうとするなどの幼児性残り、集団には受け入れられにくい状況があった。
- ・周囲の状況を理解してそれに合わせて自分の気持ちをコントロールすることが難しく、やりたくない時には床に座り込んだり、その場から離れてしまったりなどの行為が見られた。
- ・日にちや曜日、時間の感覚が持てていないため、自分のスケジュールや家族の予定を正しく把握できていないことが多く、自分の思いと違っているために混乱し、家で暴れては叱られることを繰り返していた。
- ・神楽が大好きで、石見神楽や広島神楽の話をする。休日に神楽に連れていってもらうのを楽しみにしている。
- ・家ではiPadで、神楽の動画を見て過ごすことが多い。

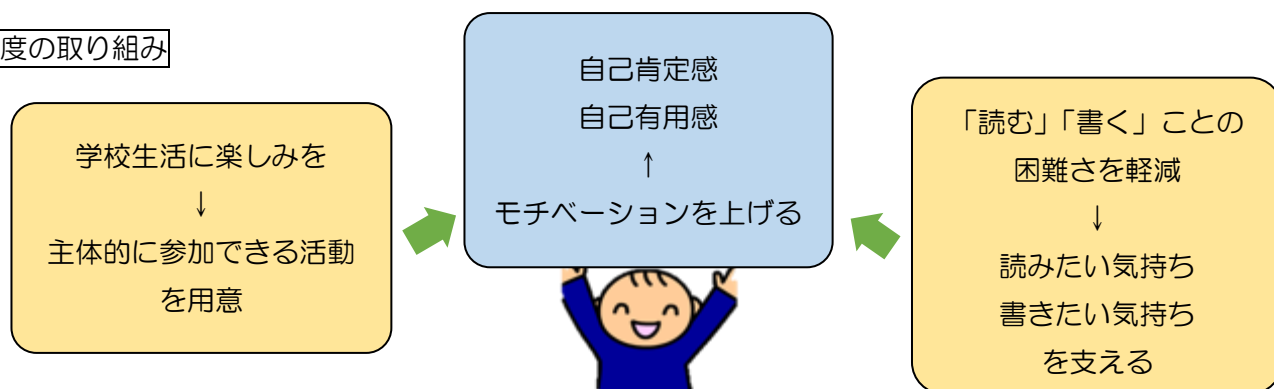


○活動の具体的内容

☆学校生活に目的と楽しみを持たせ、生活全般におけるモチベーションを上げるために、対象生徒の興味に寄り添いながら、主体的に取り組める活動を設定することを基本に取り組んだ。卒業後の生活に楽しみを持

って生きていけるよう、残りの中学校生活で「自己肯定感」「自己有用感」を醸成していくことが大切であると考えた。

昨年度の取り組み



「書きたい気持ち」を支えるために

○発音練習のためのフラッシュカード作り



発音の練習をするためのフラッシュカード作りに取り組んだ。「あ」から順にその音で始まる言葉を想起し、一緒にキーボード入力の練習をしながら作成していった。身の回りにある言葉で自分たちが馴染み深いものを選び、それを一音一音確かめながら打ち込むことで、文字と音をつなげることを意図した。

キーボードは、初め「こどもキーボード」を使い、キーボードを使うことに興味を持たせ、その後ひらがな50音キーボードに変えていった。アクセシビリティ機能の「スピーチ」の「入力フィードバック」を使って、文字や単語の読み上げを聞き、入力文字を目と耳とで確かめながら、文字入力を行なった。



文字を入力した後、画像を検索し、自分でイメージに合う画像を選んでペーストしていった。画像検索の時、検索バーにもう一度同じ文字を入力し、さらに作ったシートを再生しながら声を出して読み、反復していくことで定着を図った。

○クイズで音と文字をつなぐ



対象生徒の大好きなクイズの形の教材を「Bitsboard」や「FingerBoard」に作り、国語の時間に取り組ませた。題材は、先生や学級の仲間の名前や大好きな神楽の演目を使った。シートに音声も入れて、音を確認められるようにした。



「Bitsboard」のテキストは、対象生徒の様子を見ながら、ミススペルを加え、少しずつ難易度を上げていった。「FingerBoard」のシートは、選択肢の位置を固定せず、フォントの大きさや位置を変えながら、「見る力」を育てることも意識して作成した。



○文を書くために



身の回りのことを文にすることから始めた。毎日の出来事を話し伝え、文にもらったものを視写することから進めていった。音と文字との繋がりができてきたら、自分で文を書くことを支援した。「絵日記アプリ」で写真を見ながら、キーボードで文字を音で確かめながら入力させる。助詞の学習は「DropTalk」を使って行った。



「読みたい気持ち」を支えるため



○音声読み上げで絵本を楽しむ

絵本が大好きで、よく絵本を手に入れていることが多い対象生徒であるが、絵本の内容を理解し楽しんでいる様子はなく、少し眺めてすぐに放置する様子が続いていた。そこで、アプリ「読み放題」やアプリ「よみあげ絵本」を使い、自分でアプリ内の絵本を選んで、音声の読み上げを聞きながら、自由に絵本の内容を楽しむ環境を用意した。

主体的に参加できる活動を用意する

○ニュースのお届け



対象生徒は保健係で、毎日保健室に健康観察簿を届けに行く役目があったが、ルーティンワークとして定着が難しかった。そこで、朝の会で自分がお知らせしたい「今日のニュース」を「Keynote」に作り、iPadを持って保健室に行き、健康観察を届けた後、校長室や事務室、売店を訪問して「今日のニュース」を紹介して教室に帰ってくるという取り組みを始めた。

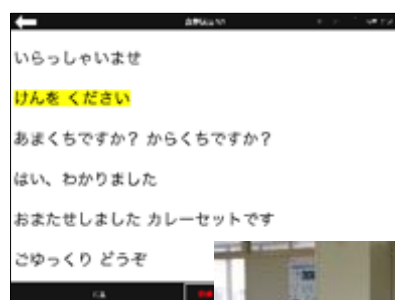


○音声読み上げを聞きながら覚える



9月に行った食堂バザーでは、食券販売や食堂バザー当日の接客のセリフを練習するために、アプリ「かたりべ。」を使った。ハイライトで示されたところを目で追って、音声に合わせて声を出して、繰り返し練習した。また、自分の音声も録音し、自分で聞いて確かめることも行った。

当日は、それを手掛かりにしながら丁寧な言葉で接客できるように、テーブルにiPadを置いた。



○手順を見ながら作業

調理実習等の作業場面では、自分のペースで手順を見ながら作業を進められるように、「PowerPoint」で作業の手順シートを作り、「i 文庫 HD」に保存した。自分で絵本をめくるようにページをめくりながら、作業を進めていった。



○画像検索→神楽グッズ作り



大好きな神楽を題材に、神楽グッズを画像検索して調べ、それを見ながら神楽の道具を一緒につくって楽しんだ。「鬼の面」「衣装」「鬼の手」など、自分で画像を検索して、自分の欲しい神楽の小道具を選び、それを見ながら廃材を使って形にしていた。

画像を検索して探し、それを見ながら廃材で作った小道具で神楽の舞を披露している。



○発表会での和太鼓発表



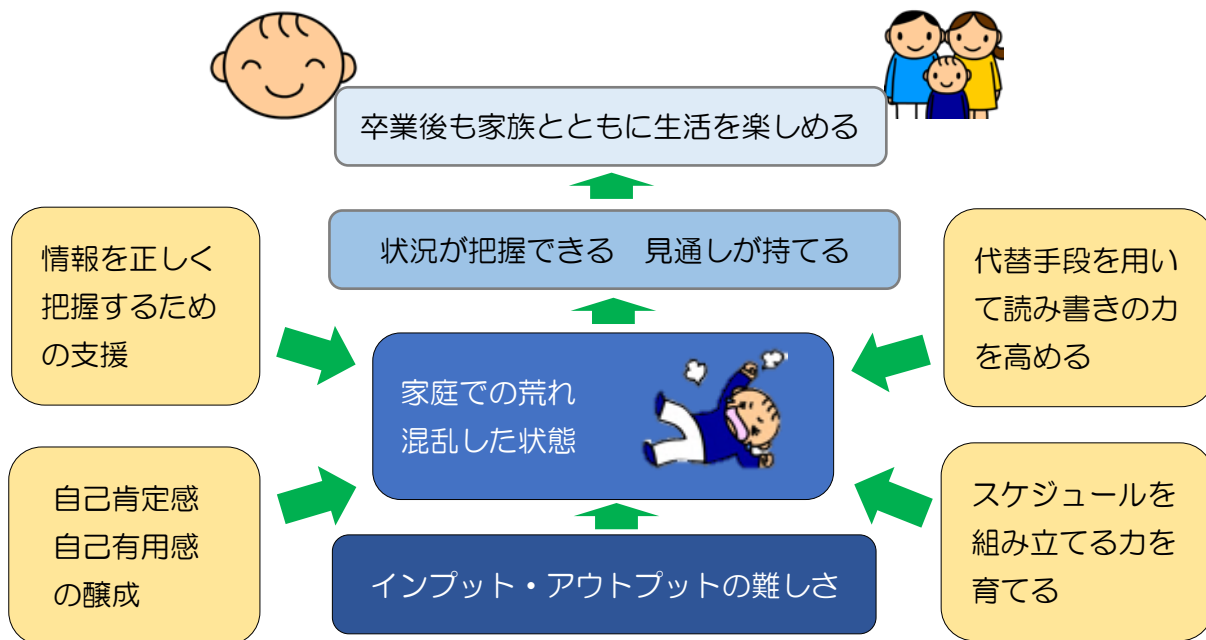
2月に行われた発表会では、動画で神楽の舞を見て、好きな場面の動きを覚え、太鼓のリズムに合わせて神楽の舞を踊った。動画をアプリ「ウゴトル」に保存し、何度も再生したり、スピードを変えスローモーションで確認したりしながら動きを覚えていった。



今年度の取り組み

1 年間の取り組みにより、日常生活における意欲の高まりが見られ、教室からの飛び出し、廊下での座り込みなどの行為が見られなくなった。「～がしたい」「まだやりたい」という言葉が聞かれるようになり、学習に対して主体的に取り組む姿が見られるようになった。

しかし、学校行事への参加の難しさや家庭での荒れが続いていることから、今年度は、情報を正しく把握すること、スケジュールを組み立てる力を育てることを昨年の活動に加えて取り組んでいきたいと考えた。



代替手段を使って、読み書きの力を高める

○「昨日の出来事」(日記)



昨年度から継続して書いている日記を、昨年度末ごろから「SimpleMind」を使って書き始めた。キーボードは、ひらがな 50 音キーボードからフリック入力を選んで使い始めた。マインドマップをそのままプリントアウトして日記として綴じたり、マインドマップを見ながら紙に書き写した。また、発表の時には、マインドマップを TV 画面に映し出し、それを繋いで読みながら学級の仲間に話し伝えた。



情報の把握とスケジュールの組み立て

○自分でスケジュール表を作って把握



対象生徒が「DropTalk」のスケジュール表のキャンバスを使って、しおりや配布プリントを見て、必要な情報を見つけながら、自分でタイムスケジュールを入力し、担任と一緒に当日の動きを確認した。職場体験・体育祭・野外活動のスケジュールをその都度自分で作るようにし、当日はプリントアウトしたスケジュール表を見ながら、次の行動を確認しながら動くようにした。



○「ByTalk for School」でのやりとり



6月14日から「ByTalk for School」でのメールのやり取りを始めた。初めは教室内でメールでのやりとりの楽しさをしっかりと味わわせ、夏休みに向けてiPadを家庭に持ち帰られるように準備を進めていった。本人と両親、担任、コーディネーターでグループを作り、メールのやり取りを始めた。メールのやりとりは、以下の3つを「ねらい」として取り組んでいる。

①「一日の振り返りとして」

対象生徒と担任が、帰りのSHRでその日一日の振り返りをし、「ByTalk for School」のグループチャットに「今日褒められたこと」や「楽しかったこと」など、両親に伝えたいことを書き込んで送った。両親からの返信でしっかりと褒めてもらい、頑張った自分を感じながら家に帰り、家庭でもその話題に触れてもらうようにした。

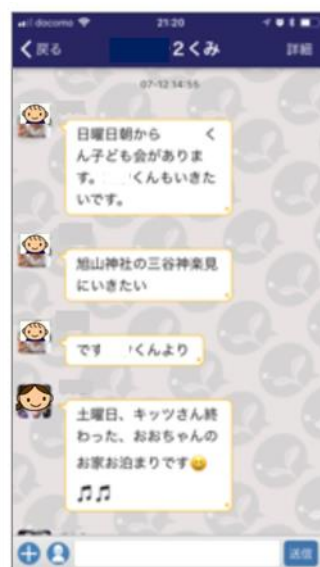
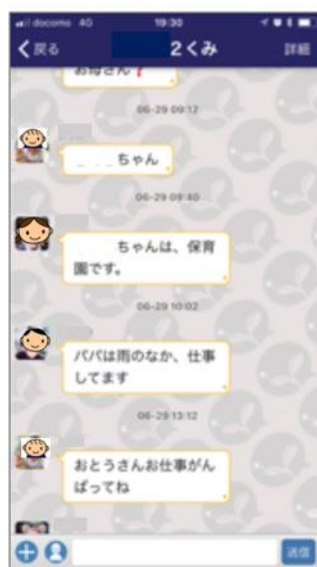
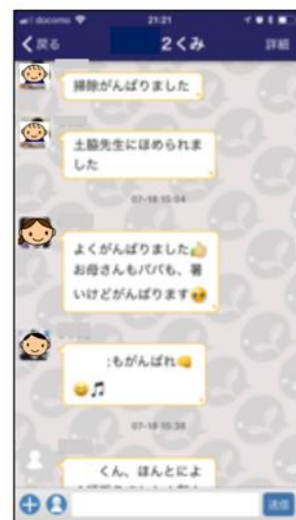
②「対象生徒と両親との情報の共有」

～家族の情報の見える化～

対象生徒は、週の半ばになると週末の予定が気になり、母親に確認するが、自分の思いが先行し思い込んでいたり、聞き間違っていたりすることが多いため、担任と一緒に週末に向けてメール上で予定の確認を行った。対象生徒が、自分の希望を伝えて、母親からは実現可能な週末の予定をメールで返していただき、それを見て予定を確認させた。文が長く読みづらい時は、音声読み上げを聞いて確認していた。聴覚からの情報をキャッチしにくい生徒に、「ByTalk for School」の画面上で家族の情報の見える化し、残らない音声情報が「そこ」を開けば確認できるようにした。

③「家庭の様子を伝える」

夏休みに入るときに、家庭にiPadを持ち帰らせ、夏休みの出来事をメールで伝えるようにした。メールを毎日送ることを約束するのではなく、本人のペースで伝えたいことがある時にチャットに書き込み会話しようと提案した。夏休み中の出来事を教員と共有し、伝えられる喜びを味わわせるよう取り組んだ。



○カレンダーを利用して



1～2週間の見通しは持てるようになってきた対象生徒であったが、月単位になると、「2」「12」「20」などを聞き分けることが難しく、日にちの把握で混乱することが多かった。そこで、「PhotoMemes」を使い、月単位で予定を書き込み把握できるようにした。月が変わると、自分でアプリを開いて、把握している予定を書き込んだ。



自己肯定感・自己有用感の醸成

○文化祭での神楽コーナー

文化祭を主体的に取り組み、達成感を持たせたいと考え、今年度の文化祭では対象生徒の大好きな神楽コーナーを作することを企画した。対象生徒がイニシャティブを取りながら、自分の世界をみんなに伝え、楽しんでもらうという企画を考えた。担任が対象生徒と相談し、神楽コーナーの内容を考えていった。

「神楽事典」「神楽おすすめシーン」「神楽クイズ」を作成し、校内で展示見学している生徒や保護者に披露しようということになった。今まで、自分の「好き」を詳しく伝える機会も手段もなく、自分一人で楽しんできた対象生徒が、「これが好き」「～だから好き」と、画像や動画を手掛かりにしながら伝えられること、自分の「好き」を集めて保存していくことに喜びを感じながら、「ぼく、神楽クイズ作ろう」と、自ら神楽コーナーの準備に積極的に取り組んでいった。

①神楽事典の制作

神楽事典は、「Book Creator」を使い、対象生徒が神楽の画像や動画を見る時によく出てくる単語を用いてカテゴリーを作り、それぞれのブックのタイトルにして表紙を作り、対象生徒が自分で画像を検索してはカテゴリーごとに保存していけるようにした。「鬼」「姫」「若者」「お面」「演目」のカテゴリーに、画像を保存しながら神楽事典を完成させた。



②おすすめシーンを動画編集



どの神楽団の、どの演目の、どの場面が好きなのかを担当に伝えながら、「iMovie」で動画を編集し「Book Creator」の「神楽おすすめシーン」の本の中に保存した。



③神楽クイズの準備



神楽クイズは、演目を当てる問題や「姫」か「鬼」かを当てる問題などを「Keynote」に作っていった。

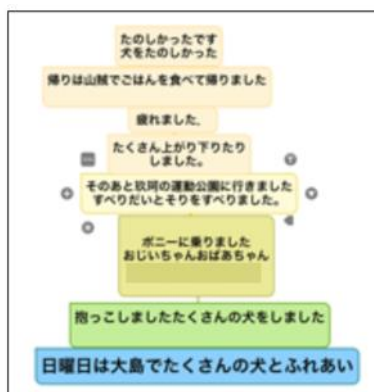
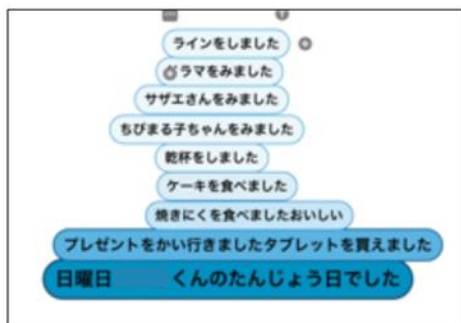
「Bitsboard」の Puzzles のゲームで、画像を組み立てる途中の画面をスクリーンショットで撮りながら、クイズのスリーヒントを作った。



○対象生徒の事後の変化

日々の日記では

短文を下から上に積み重ねていくのが気に入って、日々の家庭での様子を「SimpleMind」で書き綴っていった。



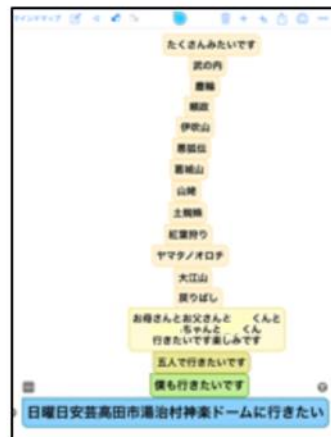
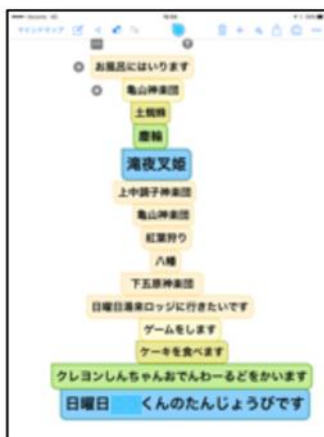
自分の思いを書き始める

昨年度末ごろから週末が近づく「SimpleMind」を開いて、自分の思いを書き始めた。自分の誕生日にやりたいこと、「郊外の温泉に行き、神楽の上演を観て、お風呂に入りたい」という気持ちを綴っている。

「自分の思い」を書き綴ると、それを父親に伝えようと、マインドマップを見ながら手紙を書き始めた。手紙に書きたいことを一旦キーボードでiPadに書き、それを見ながら紙に書く方法を自分で考えて実行していた。「こうすれば上手く書ける」という代替手段活用の成功体験を重ねて、iPadが自分の「書き」を助ける手段として活用できることを体得してきている様子が見られた。



気持ちを伝えたくて手紙を書き始めた。マインドマップに書き出していない言葉は新たにキーボードで入力し、それを見ながら便箋に書いていた。



学校行事への参加

○体育祭での変化

昨年度の体育祭では、フィールドの真ん中に座り込んで動かなくなり、競技を中断させてしまったり、競技中に母親が気になり、保護者席に行ったまま動かなくなったりと、体育祭への参加そのものを検討するべきではないかと考えさせられる状態だった。「体育祭に参加させられているけど、楽しくない。僕はお母さんと帰りたい。お母さんは頑張ったらゲームを買ってくれるって言ってた。本当かなあ。気になるなあ。早くお母さんとゲームを買いに行きたい…。」そこから逃げたくて、ご褒美の約束が気になって母親に確認したくて、競技どころではない様子だった。

そこで、今年度は担任と相談し、3つの手立てを考えた。

- ①スケジュールをわかりやすいものに変える。(昨年は配布されたプログラムにルビを打ったもので確認していた)
- ②スケジュールは自分で参加種目を選びながら自分で組み立てさせる。
- ③終わった後の「お楽しみ」を保護者、本人と確認し、外発的な動機づけとして位置づける。

「DropTalk」を使い、自分で参加種目を選んでスケジュール表を作った。予行練習では自分で選んで「リレー」だけの参加だったが、本番では「綱引き」「ソーラン節」「大縄」「リレー」を選び、選んだ種目には自分から走って入場門に集合し、交流学級の仲間と声をかけ合って競技に参加することができた。

途中、何度もスケジュール表をポケットから出して、担任と確認したり、終わった後のイベントを楽しみにして、スケジュール表の一番下にメモを書き足したりしていた。自分でスケジュールを組み立てること、

頑張った後の「楽しみ」を明確にしたことで、見通しを持って活動することができ、頑張った自分をしっかりと感ずることができた。



プリントアウトして
ポケットに入れる



何度も手にして担任と確認



終わってからの予定を自分
で書き足して自分で納得

○文化祭での変化

昨年の文化祭では、クラス合唱の途中でステージから降りてしまったり、他のステージ発表にも興味を持たず、体育館から出て行き戻ってこれなかった対象生徒だった。

しかし、今年度の文化祭では、お昼に開催した神楽コーナーを楽しみにしながら、文化祭そのものに対して主体的に取り組む様子が見られた。神楽クイズの時間には司会進行をして、対象生徒がイニシアティブを取りながら、たくさんの生徒を楽しませることができた。



正解！

何の演目で
しょう？



鬼でしょうか？
姫でしょうか？

情報を把握する

○家族の予定を把握する

「ByTalk for School」で家族の予定を把握できるようになり、自分勝手な思い込みがなくなることで、家庭での荒れがなくなった。「ほら、ここに書いてあるでしょ！」と、学校でもなんども両親からのメールを見て確認する姿が見られた。

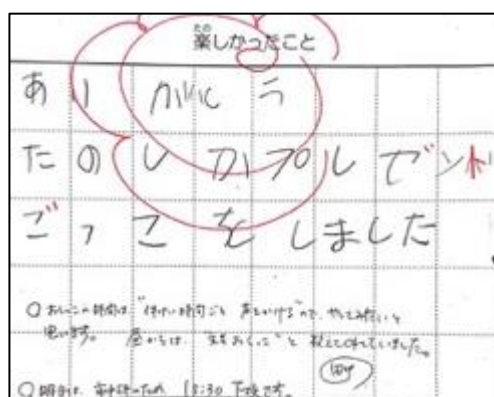
「神社の祭りに行きたい」という希望を母親に伝える。
母親からは、土曜日に児童デイの後、おばあちゃんの家
に泊まりに行くことを知らされ、予定を確認している。



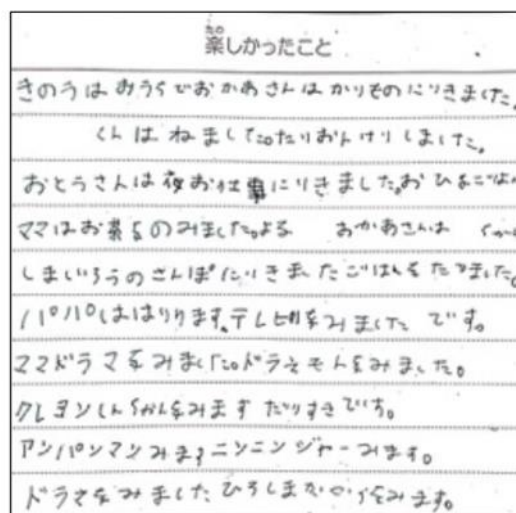
教室に掲示してある模造紙大のカレンダーに、いつのまにか対象生徒が自分の予定を書き込んでいた「Photomemes」を使い、1ヶ月単位で予定を把握するようになり、一週間の予定の把握がやっとだった対象生徒が、月単位で予定を把握できるようになった。



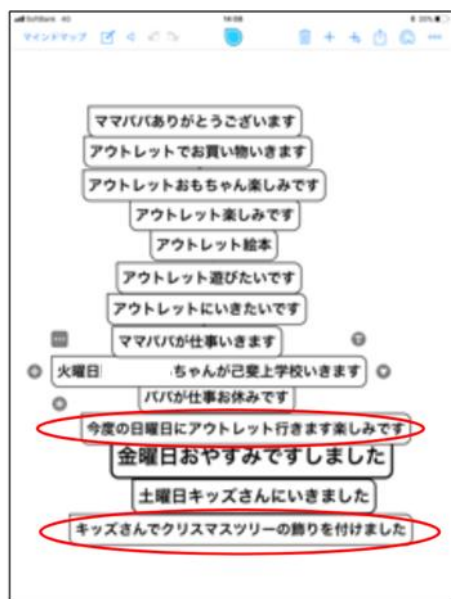
今まで書きたくても思うように書けず、文を書くことをあきらめていた対象生徒が、キーボード入力という代替手段を得て、「ぼくは書けるんだ」という自信を持つようになり、「まだまだ書きたい」と「SimpleMind」に短文をどんどん積み重ねていき、それを見ながら連絡帳に日記を書くようになった。



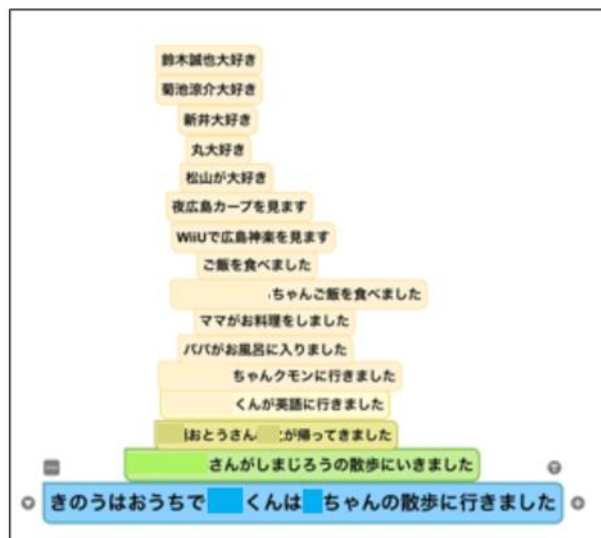
昨年度 4月12日の日記より



今年度9月12日の日記より



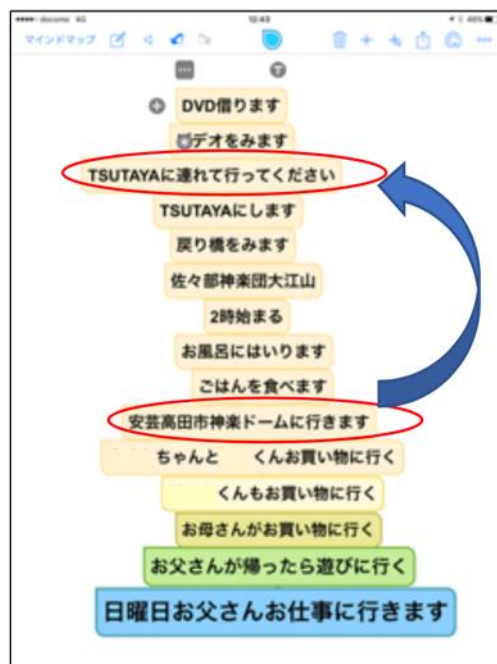
9月以降、書きたい気持ちの膨らみから、「～で」「～の」「～に」などの助詞を使って、今までよりも詳しく書こうとしている様子も見られた。また、話題が広がったり、漢字に変換して表記することが増えてきて



☆iPad でインプット・アウトプットの困難さを補うことで、自分の気持ちをコントロールできるようになったのではないかな。

情報を正しくキャッチしたり、自分の思いを伝えたりできるようになり、家庭での自分勝手な思い込みがなくなり、家庭での「荒れ」が減った。右のマインドマップは、対象生徒が学校で、週末に自分がやりたいことを書いたものであるが、父親が日曜日に仕事が入っていることを理解しており、その情報と自分の「願い」とで葛藤しながらも折り合いをつけている様子がよくわかる。「父親の仕事があるのはよくわかっている。父親の仕事が終わってから遊びに行きたい。ぼくは安芸郡高田市の神楽ドーム（広島市内から1時間はかかるところにある）に行きたい。でもきっと遠くてダメだろうな。うーん、それなら TSUTAYA で我慢しよう。TSUTAYA に連れていってもらおう。」というように考えながら、気持ちを切り替えているのであろう。

今まで、耳からの情報を上手くキャッチできていなかった部分があり、それを iPad 内に視覚化した情報を置くことで、本人の理解に繋がったと思われる。また、キーボード入力という代替手段を得て、自分の思いも伝えられるようになり、伝わる安心感も感じたのではないかなと思われる。iPad の活用でインプット・アウトプットの困難さが軽減され、自分の気持ちに折り合いをつけられるようになったのではないかなと考えられる。



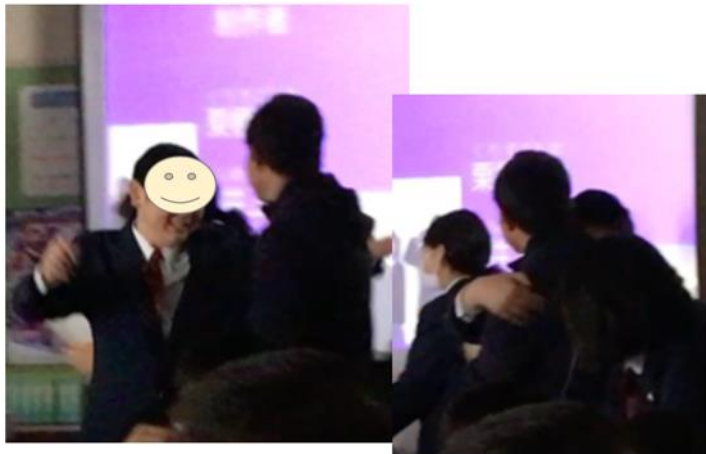
☆iPad を活用し、自分の「得意」を膨らませることで、自己肯定感や自己有用感が高まったのではないかな。

1月24日に行われた2学区合同の小中交流会で、今年度本校が会場校として児童・生徒・保護者合わせて100人を超えるお客様を迎えることになった。学級でプログラムを考えている時、対象生徒は文化祭で盛り上がった神楽クイズをもう一度やりたいと希望し、神楽好きの仲間と一緒にクイズに工夫を加えて、他校の小学生や中学生にも楽しんでもらうことになった。対象生徒は、全員が参加できるように考え、「姫だと思ふ人は頭に手を当てる」「鬼だと思ふ人は鬼の真似をする」など答えを動作で表してもらうことにして、「Keynote」のスライドを作り変えていった。



当日は、対象生徒が神楽クイズの司会を担当し、参加者全員を楽しませることができた。終わった後、会場の小中学生から「楽しかった～」の歓声と大きな拍手をもらい、とても満足そうな対象生徒だった。

今まで、学級の中でも活躍の場が少なかった対象生徒が、たくさんの人の前でマイクを持って堂々と司会進行をして達成感を得ることができたのだった。文化祭での経験から、対象生徒に自己肯定感や自己有用感を持ち、またさらに次の行事につながったと感じた。やり終えた時には担任に抱きついて喜ぶ姿は大変印象的だった。



【今後に向けて】

○進路先への支援の引き継ぎ

中学校で手に入れた代替手段を、中学校の時代だけの出来事で終わらせないように、対象生徒が獲得した代替手段をさらに活用して自分の世界を広げていけるように、進路先となる特別支援学校高等部への引き継ぎをしっかりと行っていききたいと思う。対象生徒が、次の場所でも、自分で iPad を開いて自分の「得意」を伝えていけるように、また、iPad の活用の有効性が伝わるようにするために、対象生徒が次の場所で使うデバイスに、彼が今まで作ってきたデータを移し、彼の学習の軌跡を残しておきたい。

○自分で余暇を組み立てられるように

対象生徒のご両親は自営業をされており、将来は対象生徒に家の仕事を手伝ってもらいたいという願いを持たれている。将来の彼の姿を思い浮かべると、家族の状況を正しく把握して、自分の気持ちとの折り合いをつけながら、楽しく穏やかに暮らせることが、彼の幸せ、家族の幸せにつながると考え取り組んできた。

そして、卒業後も、そのような生活の中で、彼が自分の余暇を自分で組み立て世界を広げていきながら、さらに多くの「大好き」や「楽しみ」を見つけていけたらと願う。インプット・アウトプットしながら、自分の力で余暇が組み立てられるように、卒業までの残された時間で支援を続けたいと思う。

○外発的な動機づけがなくても

いつのまにか、頑張ったらどこかに連れて行ってもらえるとか、頑張ったら何か買ってもらえるとかという約束がなくても、頑張れるようになった対象生徒である。外発的な動機づけが必要だった彼が、活動そのものを楽しみたいから頑張る彼に変わってきた。これからも、獲得した手段を使い、楽しい経験をたくさん重ねて、主体的に活動することの喜びをたくさん感じてほしい。

そして、できる自分を感じ、自己肯定感や自己有用感を持って、やらなければならないことにも向かっていく力をさらに獲得して行ってほしいと願っている。

